

評釈「マノン・レスコー」

根 岸 国 孝

ま え が き

風土の関係上、フランスには甘藷はできないのだが、フランス種の歌劇はオイランばかりで金時がないという話をよく耳にする。つまりマノンの血を引いている作品が多いということなのであろう。この多産な娼婦マノンは 1731 年に、プレヴォ神父の「世間から隠退した貴人の覚え書と冒険」という一連のロマネスクな小説集の第 7 巻としてアムステルダムで生れた。

この小説集はいまでは世間から忘れられたが、その第 7 巻「騎士^{シユヴアリエ}デ・グリューとマノン・レスコーの物語」は、出版当時ルソーが同作家の Cleveland の方を推し、読者も後者を支持したにもかかわらず、1753 年の改訂版以後、特にローマン主義時代に入って大に人気を博し、いつしか表題は単に「マノン・レスコー」と変り、サント・ブーヴ、小デュマ、アナトール・フランス、モーパッサンなど文壇のお歴々の後援を受け、マスネー、プッチーニの手を経て歌劇にも出演し、最近は映画のスターにもなっている。マノン万才！

だが、その蔭にかくれて、有名な女性の亭主がすべてそうであるように、騎士デ・グリューは小説の表題から名を落され、リチャードソンの小説の翻訳その他多彩な活やくをしたプレヴォ自身も、多産なオイランを生んだ神父さまという、皮肉な褒詞しか受けていない。しかし、「この墮落した娘に万人の同情を集めるために、どれほどの技巧が必要だったか」と作者は云っているし、かれの作り出した二枚目は「わたしの選んだ人を見て下さい」といまだに叫んでいるのだ。

第 1 部

語り物には伝統がある。語り手と主要な登場人物——それがしばしば次の語り手となるのだが——がなにか特別な事件をきっかけとして結ばれる。十日物語にはベストがあり、八日物語には洪水がある。そこで、この物語も貴人を騎士デ・グリューとその愛人マノンに引合せるため、「インドの鎖」が引きずられて行く場面を展開する。インドとはインド諸島、つまり、アメリカであり、鎖とは、そこへ鎖でつながれて行く哀れな女性達のことである。貴人はその1ダースの女性のうちに「第一級の身分に属する婦人と思ひ込んだかも知れない」美人と、それに影の身に付きそうように付添っている、「兄弟か、愛人か、」と思われる物腰尋常な青年を見出した。そして「インドの鎖」をこの種の女に特に興味をそそられる野次馬のなかで、こんな野蛮な話であるかいと叫んだ老婆の声を耳にした。「警視総監殿の命令」に従って護送する警察官と、その青年の口から、この女性はたいして悪いことをしているわけではないのだが、彼女達に乗りたがる猟奇家に「目こぼし料」として警察官達は一定の金額を受取る事にしている。ところが、この青年は単なる猟奇家でない事が解ったので、ショートタイム巻千円という格安な専売価格では引合わないので、「目こぼし料」を引上げた。彼の財布が空になってもなお女から離れようとしないう。やむを得ず、憲法第X条に従って女に近づくたびに彼に銃口をつきつけているのだが、税務署と比べて役得の少い警察として、「あの野郎から、この程度の代償を求めるのは、当たり前じゃないかと思いますね」と巡査部長殿が答えた。貴人は、アメリカまでの「目こぼし料」を尋ねたら、巡査部長は「2ルイとふっかけた」。貴人は「即座にその金を与え、断っておくが、わたしは不肖バンボク閣下とは懇意にしている。もし君がわたしとの約束を忠実に守らないならば、将来盛り場の署長になって、退職してからもOZ組の参謀になって栄耀栄華の暮らしが出来ると思ったら大間違いだぞ」とドスを利かせた後、「インドの鎖」がアメリカに送られるのを見送った。後日、この青年にたまたま巡り合って、その口から「マノン・レスコー」の物語を聞いたのであった。

角力において立ち合いが大切であることはテレビを見ている少年達

はみな知っている。十日物語や八日物語のペストや洪水は、物語にとってほとんど関係がない、刺身のつま以下である。むだといってよい。ところが、15 か 16 の子供が巡査に引立てられて行くのを見た時、君は野次馬の一人として、「何だ、何だ、まだ子供じゃねえか逃してやれよ。この税金泥棒」と叫んで、わが日本の警察官を罵るのではないか。だから、フランスの読者も、プレヴォ神父の仕切りのうまさに眩惑されて、偉大な歴史家ミシュレの云う如く眼を泣きはらしている女中さんを不審に思った奥様が、気がついて見ると単箭に仕舞っておいた筈のマノンが、後者のスカートの下に隠されていたほどに、完全に立ち合い負けさせられてしまったのである。こんなあどけない娘が、なぜ卑しい警察官の食いものにされなくてはならないのか。惚れてさえいなければ、立身出世が出来る筈の青年が何故この娘と運命を共にしなければならないのか。作者は、始めからこの物語が恋愛小説であると同時に、社会小説である事を、はっきり示しているのだ。この序曲は、技巧として優れているだけでなく、内容的に云っても、論文の結論というべき重要な地位をしめている。殆んど同時に発表された Cleveland と Mann とを作者の従前の作品と飛躍的に変化せしめたものは、伝統的文化とイギリス文化との醸製が、作品の事件の展開にともなう、感情の変化の裏づけとして優れた思想が横たわっているからだ。洞窟に育てられた Cleveland が母親から授けられたのは理神論にもとづく教育であり、それが事件と共に自然宗教になり、最後に伝統的宗教に落着く。18 世紀のフランス人が一世紀かかって経過する宗教的変遷を、一仏人の魂の遍歴として、それに先立って示したロマネスクなこの小説は、小説以上の小説であろう。これに対し、「マノン・レスコー」には 18 世紀から 19 世紀にかけて人心を支配した快楽主義・功利主義哲学が事もなげに展開されているのである。そしてわれわれの眼の前にあるのは、さぎ師、娼婦とさげすまれる改革者と、崩壊寸前の権力を代表する豚どもなのだ。豚から羊へ戻ろう。Revenons à nos moutons !

「読者の関心を騎士デ・グリュエとマノン・レスコーの情事に集める

為には、どれ程の技巧が必要だったことか」(Pour et contre, N° 36)と作者自身が告白しているように、プレヴォ神父は、始めから読者をだましにかかっている。「わたしは、この上ない不幸に、好んで飛び込むために、幸福になることを拒否する一人の若い盲人を描かねばならない」と、この小説の前書きで作者は述べている。これは快樂主義哲学を擬装するための作者の心遣いであって、主人デ・グリュース、実は幸福の追求を総てとする功利主義哲学の選手で、彼の行動は、すべて計算づくである。彼がホモ・エコノミクスにならなかったのは、ベンタムや俗流経済学者とちがって資本主義社会を建設させるために絶対王政と対決しなければならなかったからだ。そして、この革命家は、しばしばその後輩エルヴェシウスよりも進歩的で、ローマン主義者スタンダールに接近する。これが 19 世紀にこの小説のもてはやされた理由である。

貴族の次男坊に生れ、財産の大部分は兄貴に継がれる、デ・グリュースの出世の道は軍人と聖職であった。彼は軍人として出世するため、野球の代りに神学を勉強し、ラテン語の試験にホームランを放った。アミヤンの司教様は坊主になれば金も女も自由自在といって彼をスカウトしたが、彼は両親の胸算用によってマルタ騎士団に投じて騎士の称号をうける。実業球団に入る方が確実であると思ったからである。

運命の神はこのガメツイ親父、ガメツイ倅を罰するために、デ・グリュースがアカデミー入団の下相談に帰国する前日、マノンをアミヤンに送った。

絶対王政下の新興ブルジョアジーにとって、俗流功利主義はややもすれば保守、反動に墮落するおそれがある。快樂を求め、苦痛をさけるのがあらゆる行為の原動力であるが、マイナスの価値である苦痛をゼロに近づけるために、プラスの価値、快樂を最小限で我慢する未開人や修道僧を、この学説は非難することが出来ない。彼等は余分な収入を得れば、どんな好条件なもうけ話を勧められても、アルコールが切れる時まで働らこうとしない。これも消極的な快樂主義には違いないが、これでは生産的な労働力は提供されない。広大な土地を生産的

に活用しようとししないで、わずかな地代で酔生夢死の暮らしを送っている坊主や貴族も苦痛をゼロにして、わずかの快楽を気長に楽しむ快楽主義者である事は間違いないのだが、この生活を肯定することは新興ブルジョアジーにとって、階級的裏切りとなる。苦痛を避けるために僅かの快楽に甘んじる怠惰を悪徳とし、より多くの快楽のためには、どんな苦痛もいとわない冒険心、つまり、情熱を美德とする道徳が生れる。その学説は 18 世紀後半エルヴェシウス達により展開されるのだが、プレヴォ神父は、デ・グリューを選手として 31 年に早くもそれを発表してしまったのだ。

ギヴ・アンド・テイクの社会においては、苦痛を少しも負担せず快楽だけを獲得するということは不正なしにはありえない。この社会では不確実で即座にはえられない快楽を獲得するために、苦痛、危険をいとわない行為の習慣が美德であり、その担当者が英雄でなければならない。このような美德、英雄を生みだすものこそ、情熱なのである。この火酒や麻薬のような快楽獲得の欲望をかきたてるためには一方、怠け者の尻をたたき、冒険心をそそる信賞必罰の政府の樹立、他方、勤労意慾を死滅させる専制主義、教会、封建的土地所有、家父長の打倒が必要とされる。

娼婦マノンに乗せた駅馬車がアミヤンの旅館に近づいたのは、こうした歴史的要望に答えるためであった。

このマノンの到着を迎えるデ・グリューという男は元来、サンコ・パンサ的人物であって、現代に生れたら、ワンタン屋の倅で、チャルメラの代りにバットを握った方が割が良さそうなので学校に入って野球を勉強し、莫大な身代金で、マルタ球団と契約し、親孝行の名を轟かせた、ガメツイ野郎なのである。順調に行けば、球団の監督になるか、銀座に餃子の専門店を開く筈であった。ところが、恋というものは何という奇蹟を作り出すものであろうか。マノン如来の来迎によって、サンタはたちまちドン・キホーテになり、久しきにわたって若き男女の紅涙を絞らせることになる。

マノンは何処にもいるミーちゃんハーちゃんであると同時に、デ・

グリユーの情熱によって創り出され、修正されたヴィジョンである。彼女の原型は好事家の調べによると、ヴェルサイユの通称マノンというマリ・マドレーヌ・シャヴィニーという 19 歳の女、常にバリで男装して、公衆を相手に破廉恥な売春を行っていたため、国王の命令書により、サルペトリエールに収容され、1719 年 6 月 27 日流刑のリストに乗せられた人物であるか、アンジェのプロジェまたはカンタンという女で、ド・ラ・ヴァレンヌ殿を誘惑し、ナントにおいて投獄され、脱走し、彼と共に、ミシシッピーに出発し、ド・ラ・ヴァレンヌの手からルイジャナで権勢を振ったクロワザの腹心ランソンという男に奪われたアバズレではなかろうかという。それはともあれ、マノンという名が、イフィジュニーとかフェードルというような高貴な女主人公を表わすものでなく、ミミーとかチェリーというような赤線女性を連想させるものらしく、彼女のような友愛精神に富む女性を待ちもうけるものは、修道院、サルペトリエール匡正所、流刑であったことがこれによって知られる。マノンはこの閥門のいづれにもぶつかったが、最後のそれが命取りとなった。処がこのマノン嬢は我々の前に一度も現実の姿を現わさない。その姿はデ・グリユーの、あばたもえくぼに映る惚れた眼を通じ、その声音は間接話法によってデ・グリユーの話を通じて、知られるだけである。だから、そのうつしみのいやらしさは浄化され、我々には理想化され、偶像化されたヴィナス像のみが与えられ、逆に、彼女を迫害した摂政時代の権力レジャンスのみにくい姿が浮彫りにされる、ここに作者の技巧の冴えがあるのだ。

素行が修まらないため、修道院と云う牢獄に入れられる事になった 16 歳のマノンは、駅馬車から降りると、脱出の最後のチャンスをねらっていた。そこへ、17 歳の品行方正、学術優等の秀才が好奇心にかられて、ひょこひょこやって来た。彼の「話しかける仕方が、胸の中をはっきりと彼女に語らせてしまった。なにしろ、彼女の方がはるかに経験があったのだから。」いいカモだ。こいつを生捕る作戦は出来るだけ卒直に、無邪気に振舞うこと。チョンガーにはこの手が良い。だが一度裏切った男を自分に引戻す時の定跡は別である、駅馬車の場と、

神学校応接室の場を較べてみると、マノンが相当な手どりだったとわかる。この二つの場面を比較してみよう。二度目は、こちらの不実が頭にきている相手を料理するのだから、腕の振り甲斐がある。寸分の隙もない身ごしらえをした上で相手が全く予想しない場所と時を選んで世にもなよなよとした姿で出現する。相手がうっとりと腰をぬかしている前で、片手を瞳にあて、ためらい勝に口を開く。「私のしたこと御免なさい。こうするより仕方がなかったの。それに対して、あなたは随分不実な方なのね、私のことを一度も思い出して下さらなかったんですもの」と鼻声で云い乍ら、流し目でずっと見つめておいて、「私は死ぬつもりで来たのよ。もし、貴方の心をそのまま普通通り、私の手に返して頂けないのなら」と云えば、男性の99%は、僕が悪かったということになる。だが、駅馬車ではこんな演技はオーバーである。マノンと友達になれると思っていたのに、尼寺行と聞いて父権の「残酷な計画を烈しく攻撃」している相手には、「何もかも神様の思召です」と哀愁に充ちた表情を示すだけでよい。これで相手は、「生命をかけても横暴な父親の手からあなたを救い出し、幸福にしてみせましょう」と云わざるを得なくなる。この、天に代って不義を打つ精神を不動のものとするためには、そのお心ざしに報いるためには、「生命よりもっと大切なもの」を差上げると云えば充分だ。二番煎じであるにしてもそのものが何だか無経験なデ・グリュは監視人を見ながら、人の恋路の邪魔する奴は……と思うのだが、追払う方法を知らない。マノンはまるで、その場で思いついたように、二人は従兄妹同志で、偶然ここで落合ったから晩飯を共にしたいとその野郎をごまかすが、デ・グリュにはこの嘘が、予め計算したものとは気が付かず、恋が教えた知恵だと思う。食事を共にしながら駈落ちの相談を持ちかければ、後の仕事は男が万事引受けてくれる。これでマノン如来御一代記の中、修道院の御難は目度なく切り抜けられたのであった。

マノン・レスコー
以上、恋愛読本第1章、第2章参考。

マノンにパッションを植付けられドン・キホーテと化したデ・グリュは、サンドニの宿屋を経て、バりに達しV……街の家具付アパー

トに到着いて、数週間後裏切られる瞬間迄、全く無我夢中でこの冒険が自分に損害をもたらしただとは少しも考えなかった。ままよ騎士団、マノンと寝よ。ただ、キホーテとサンコとではソロバンのはじき方が違う。平静に返るとデ・グリュウの中のサンコが、生活の設計をしはじめる。親父と和解をした方が良さそうだ。それは「恋や義務の為という理由の外に、そうする必要」があるからだ。縞の財布に 50 両あってさえ、駆落ちすれば二分しか残らない。この際親の義務を尽させれば、こちらの生活も安定するし、相手の後生も助かるから、一挙兩得というものだ。

この立場から行ったデ・グリュウの提案をマノンは冷淡に、落着き払って却けた。彼女には始めから成算があったのである。V… 街とは、Vivienne 街の事であり、ここは官許商人とか富裕なブルジョアの住宅地で、デ・グリュウとちがってパリの地理に明るいマノンがここに宿を定めた時、このイカレポンチを見捨てる腹はすでに出来ていたのである。我々にとって幸な事に、彼女の乗りかえた馬は徴税請負人であった。官許商人は国王にとっても、人民にとっても有害無益な寄生虫である。清朝は塩を専売にして、その販売を引商に請負わせた。だから私塩、即ち塩の密売を船や車で行うギャングの組織青帮でさえ、俠客として人民に迎えられたではないか。人民の出身でありながら王権をかさに着て人民を搾取して作った不義の富でも、資本として蓄積されれば益となり得るのに、前資本主義的官許商人は、ブルボン王朝でも清朝でも例外なく非生産的に使いはたして仕舞う。彼等は尤も、悪い庶民であり乍ら、最も悪い貴族なのだ。モンテスキューも官許商人を非難した。それを「信用ある商人は有害である」と邦訳した人があったとすれば、それは法律を知らない人だろう。こんなわけでマノンがド・B氏を傷めつけることは、中世騎士が魔法使いや悪竜を退治するのと同様、正義にかなった冒険なのである。

マノンは徴税請負人ド・B氏と共謀して、デ・グリュウをあざむく。ある日デ・グリュウが外出から帰ると、マノンの私室からド・B氏が裏階段を伝って、あたふたと帰った事が解った。その後の彼の推理こ

そ称讃に値する。明々白々な事実を教えた自分の眼は信ずべきでない。何故かと云うと「私はそれを勾党と考えたかった」からだ。私がこんなに愛しているのだから、マノンが裏切る筈はない。又裏切るひまもない筈だ。「バリに来て以来、彼女から目を離した事は殆んどなかった」いつもなめたり、しゃぶったりしていたのだ。そこで、デ・グリュエーの到達した結論は、ド・B氏は顔が広いから、マノンの身内から送って来た金を彼女に取次いでやったのだらうという非現実的なものになった。彼には自分の創り出した映像が、現実には近づきかかると、それを観念の世界へ引戻すという稀に見る想像力があつたのだ。暴力を否定するアジアの一隅の青年には、彼の想像力がないために、相手に気に入らない事をすると、コマ切れにしてしまう。

他方東洋のオイランも、あまりつれなからうぜと云われないように、マノンを見習うべきだ。マノンにもデ・グリュエーに対する相当の心使いがあった。馬鹿野郎を長兄に引渡すには、一応の仁義が必要なのである。帰宅したデ・グリュエーとの夕食の燈火の下で彼が見た限り、マノンは悲しそうだった、だから彼もまた「悲しみにおそわれた」。マノンは涙をこぼした。「その涙をふいてやり乍ら私も涙をこぼした」。ここが山下清、いな、デ・グリュエーの値打ちのあるところだ。かれは情熱に促されると完全に馬鹿になれる天才を持っている。「ああ神様。愛しいマノン、君は泣いている。泣く程苦しいんだね。ああ、それなのに、その苦しみを一言も打明けてはくれない人だねえ。」と云われては、マノンも「ただ嘆息をつくばかりであつた。」扉が静かに叩かれた。汽車の中で安い絵を画いてハダカの王様が強欲なお袋と非道なマネジャーに監禁されたように、デ・グリュエーは兄貴の従僕共につかまえられて、国へ戻る。これで改心するようなら彼も、金色夜叉程度の低脳なのだが、情熱は彼を王様に近づけていた。

「残酷な裏切りに会つたのだ」これがまぎれもない真実である。ところで裏切り者は誰だろう。神学校の友人チベルジュじゃないか、だが奴にはアリバイがある。そうするとマノンが犯人だ！ だが、そんな事は考えたくない。彼女は泣いたし、嘆息をついた。おれが生捕に

なる時には、優しく接吻してくれた。だから、(ここに論理の飛躍がある)彼女を疑うなどとは、とんでもない罰当たりだ。多分、巴里を歩いている時、「誰か知人に見つかったのだ。それが父の耳に入ったのだ。」親父は意見をするだろう。意見聞く時は、頭を下げな、下げりゃ意見が上を越す。一応神妙にして親父をごまかせば、又巴里に帰ってマノンと楽しく暮せるだろう。とデ・グリューは結論したのであった。

だが親父の頭脳計算器のはじき出した数字は、これとは大分違っていた。彼と彼女の一ヶ月間の墮落ちの間、情夫として正当な待遇を受けたのは、多くとも十二日にしかならないのであった。全能の神様は振られて帰る果報者という諺をお前のために用意して下さった。「お前は乗るのも早かったが、振落されるのも早すぎた。もっと馬術の修業が肝心じゃ。マノンはド・Bとぐるになってお前を売ったのだ。それなのに、まだ飼主を慕っているのか、ウマシカめ」このポツダム宣言を聞いて、デ・グリューは当時の流行に従い気絶してしまう。だが無条件降伏はしなかった。

即ち、女房に馬鹿にされた元宮様の云う通り、裏切る筈のないマノンが裏切ったとすれば、それはド・B氏に催眠術をかけられたか、イモリの黒焼を吞まされたか、それともドスでおどかされたかに違いない。敵はマノンではなく、ド・Bである。こいつを刺殺するために巴里へ帰らせて下さい！

これでは座敷牢に監禁するよりほかに手はない。親父は彼を放り込んだ。ここで頭を冷されているうちに、山下の影が薄れデ・グリューの中のサンコ・バンサが頭を持ち上げだす。そこを狙って神学校の友人チベルジュがやって来る。彼は年長のオカマであって、そのマソヒスト振りが精神的・宗教的であるだけに、一層いやらしい。彼の性格は、この物語の始めに出ている。だがデ・グリューの表現にかかると、読者はうっかり騙されるから御用心。「恩知らずの私から、手ひどい扱いを受けて喜ぶ彼の友情は古代のいかなる有名な例も及ばない」というのであるが、古代の友情とはオカマの事だ。彼は「狂気せんばかりの様子でデ・グリューを抱きしめ」この事件をきっかけに、快樂の

空しさを覚りなさい。私自身はこの浮世を限りなく軽蔑しているのに「私が孤独の生活に走るのを防いでいるのは何だろう。……それはただ、君に対して抱いている、心からの友情なのだ。」こんないやな奴はキホーテならたき切るのであるが、サンコには別のやり方がある。坊主丸もうけと云うから、軍人として失敗した以上は、坊主になるのが一番良い。坊主にとってスチュワーズは危険だから女は、女中か、人の女房で我慢するとして、茶坊主ルソーの浮世とは遠くて近いエルミタージュ隱栖生活のような生活をここに設計する。森の中の庭の端れには川が流れていて、食事はバーベキューのように自然を思わせる質素で豪華なもの、友人は「巴里に住んでいて、私の心気を一転させるために世間の新しい出来事を知らせてくれるようなオカミとタイコ。」これで充分すぎる筈なのに「もうこれ以上何一つ不足はないと云うためにはマノンだけが欠けていた。」作者プレヴォ神父の云う通り、これは反動的勢力のための豪華な「墓場」の設計である。一見質素らしいのは革命の到来を出来るだけ引延ばそうとしているからなのだ。花札によれば、坊主にも廿坊主、十坊主、カス坊主がある。同じなるなら廿坊主だ。その安楽な生活設計図にもとづいてサンコは、デ・グリュエに坊主の修業をさせる。だが、それは同時に、キホーテにバトンを渡す結果となった。廿坊主を選ぶ公開試験に、デ・グリュエは「各界の名士に臨席の榮を賜よう」と、PRしてしまった。それがラジオかテレビを通じてマノンの耳に入ったのである。マノン如来はもともと仏であって衆生済度のために人間界に下りたもうたのである。ド・Bから浄財を巻き上げたもうたマノン如来は、仏果を得させるために筆おろしをしてやったデ・グリュエが俗界の出世というような邪道におちいるのを救うため、再び御姿を現わしたもうのだが、その場の情景は重複を省こう。「ああ、いとしいマノンよわが歌舞のボサツ」例の詠唱だ。デ・グリュエと三味線は締められる程よい音を出す。

マノンの玉代は（といっても勝手に頂いて来たのだが）二年間で宝石類と六万フラン。二人は巴里を離れてシャイヨーに居を構えた。シャイヨーは貴族や富豪の遊びに来る処、つまり、船板塀に見越の松の

お富さんが住んでいる根岸（といってもわたしには関係ないが）の里だ。そこにはイナセな兄ちゃんがヒモになってぶらぶら暮している。そこでサンコが又もや、ヒモの設計図を描き出す。「六万フランの金があれば十年は大丈夫だ。……こちらが大丈夫な間に親父は死ぬだろう。それまでの辛抱だ。」そこでデ・グリュエは男らしくも無く家計簿を付け始める。キホーテという気付け薬の入ってない時は全く見下げ果てた野郎だ。幸にも、マノンの気質と、彼女の兄で極道者の出現、更に失火が、この余りにも散文的な設計図を灰燼に帰してしまう。天の下したこの聖寵が、焼け出されて虚脱したデ・グリュエをエルヴェシウスを経てスタンダールの世界へ解脱させた。巴里には「持ち合せの能力だけで立派に食べている人が、どんなに沢山いる事だろう。」だから死ぬなんて事は馬鹿げていると、デ・グリュエは考えたのだ。

「神の摂理は実にうまく出来ているものだ。地位や財産のある奴は全部馬鹿に出来ている。……肉体と精神の長所は、すべて他の階級に与えられているのだ。彼等のタイコ持ちになる事は、富の落ちこぼれを頂戴すること、つまり、彼等をだますことだ。つける薬はないのに、彼等を教育するのは、自分が生活するためなのだ。つまり、彼等が馬鹿であるということが貧乏人の為になっているのだ。こう考えると、私は少し元気も出、分別もついて来た。」そこで、マノンの兄と相談する。彼の云うには、正直に生きられないために頭を割るのはあらゆる国で馬鹿のやる事だし、餓死するというのは、どこかの国のたった一人の裁判官みたいに、自分の才能を使ってみようとしめないキチガイに有り勝ちなことだ。」だが、僅かの金の為に、なけなしの才能を使うことの困難さは、お座敷かせぎの大学教授なら誰でも知っている。だからサンコの財政政策にまた戻る。マノンの兄は男メカケの口を世話しようと云ったが、さすがにこれは拒った。手紙を書いてチベルジュから少々借りた。こうした男のミミッチイ生活設計と兄のあつかましい搾取にあってマノンの快樂への志考は感溺に変るこれを見て自分だけの出費は出来るだけ切りつめて、むしろ自分に必要なあらゆるものを禁じようと考えたが、こんな事で健全財政は守れようか。

既成秩序への服従のための最後のレジスタンスは終わった。マノンの所得増徴政策を選ぶか、既成秩序の提供する安楽^{エイザンス}を選ぶか、二者たぐいに追込まれて、デ・グリュエーはついに生れ持った才能を生活の為に用いる決心がついたのである。それはトランシルヴァニア館におけるインチキ賭博の仲間に入ることであった。この賭場は「当時グラニーに住んでいたド・B……公爵の顔で開かれていたもので、彼の部下の大部分はわたし達の仲間であった。」摂政フィリップ・ドルレアンを支持する貴族どもは、封建地主としてだけでなく、ギャング団として莫大な収益をあげていたのである。この仲間に入ったお蔭で暮らしはむしろ、裕福になった。だが、「マノン程金銭に淡泊な女は決してなかった。それにもかかわらず金に不自由する事を恐れ、金がないと、片時も落着いている事が出来なかった。彼女になくてはならないものは、快樂であり、遊びであった。」だから、インチキ賭博で暮らしが楽になると、二人は快樂と愛欲の連続であるような生活を毎日くり返していった。「お金がふえればふえる程、二人の愛情も倍加した。」ところが、ここに大事件が起った。雇っていた下僕と女中が共謀して、家財道具の一切合財を持って、逃げてしまったのである。金の切れ目が縁の切れ目だとすれば、何らかの手を打たない限り、デ・グリュエー君は、縁なき衆生にならざるを得ない。だがサンコとしての彼には「トランシルヴァニア館に出かけ、この埋合せをつけるさ」と云うより外はなかった。「私たちはもうおしまいね、と彼女は眼に涙を溜めていった。」

カンペーに甲斐性がなければ、オカルは駕籠に乗るのは当然であり、船玉様を由良之助に見せるのは当然すぎることなのだ。マノンはド・G・Mという老貴族に囲われる決心をする。警視庁に盗難届を出して帰って来たデ・グリュエーは、マノンの置手紙を発見する。この小説を通じて、デ・グリュエーは彼の恋人の姿は絶対に他人に見せようとしな。彼を通じなければ、誰もマノンに会えない。彼女を直接に感じさせるものは、この手紙だけなのだ。だが、この手紙からマノンの正体を知ろうとする事は、バイブルからキリストを知ろうとする以上に困難なのだ。金釘流のその手紙には、誤字脱字がひどくて読みずらかつ

たろうが、「人はパンのみにて生きるものにあらず、あなたを金持ちに、幸せにするために私は筋肉労働をいたします。きみはいま、警視庁あたり郭公、忘れねばこそ思い出さずそろ。」と神と悪魔をチャンポンにした文句が並べてあった。郭公とは何だ！ とデ・グリュウは歌う。彼は愁嘆場になると必ず大衆的な詠嘆歌を歌って見せる。

オカルの兄が提出した身売りの条件を前にしてデ・グリュウは既成道德との対決にせまられる。ところが既成道德はすでに、その憎むべき卑しむべきと目している行為を禁止する力を失っているのだ。先にデ・グリュウがチペルジュから金を借りて意見された時マノンに対する恋は宿命だといった。運命の神の实在を信ずれば Destin は恐るべきものだ。オイディポス王はそのため自ら眼をくりぬいたではないか。運命に加えて罪惡の觀念の結びついた prédestination はラシーヌのフエードルをのたうちまわせた上に、毒をあおいで死なせたではないか。ところが、デ・グリュウの考えによると、それは「人間の徳にとっては防ぎにくいものであり、英知にとっても予見しがたい」存在であるが、罪惡の觀念とは全然結びつかない。もっぱらバクチの損得にだけ関係のあるサイコロなのだ。デ・グリュウは貴族の倅であるから、愛人を妾奉公に出すことには、習慣の惰性に基く反撥を感じる。即ち、「名誉や道德を思う心が、私に悔いの鋭い痛みを感じさせた」のであるが、これを 17 世紀的な意味に解釈してはならない。名誉と義務のためにロドリグは、自分の生命も賭けるし、恋人の親父も殺す、それは絶体的のものである。だが、デ・グリュウにとってはそれは「マノンと共に平和に安楽に暮す」ための条件に過ぎない。エルヴェシウスの云う通り、勲賞は現金であり、名誉は小切手であり、道德は定期預金なのだ。「なんというごまだ。この私が切られ与三の真似をするなんて！ しかし、それがマノンの意向で、それを承知しなければ、あれを失ってしまうというのなら、私がぐずぐずしている場合であろうか。」結局、宿命も名誉も道德も本来の意味はなくなり、苦痛や快樂に還元されるものとなり、お妾奉公やツツモタセと質的に区別はない。総てはギブ・アンド・テイクで、秤にかけられる。

そこでデ・グリューの理性はマノンの妾奉公に同意するのだが、パッションは別の道を選ばせる。ド・G・Mから金だけ取って、つまりつつもたせをやるとういうのである。詐欺や美人局は快楽説や功利主義の道徳から云っても、あまり良くない事である。デ・グリューの眼から見ても「この行為はたしかに詐欺であったが、その為は何よりも不正なこととして、私の気がとがめるほどのことでなかった。むしろインチキ賭博で儲けた金の方が、よほど気になっていたくらいなものだ。」しかるに「神はこの二つの不正のうちで、もっとも軽いものの方を、もっとも厳しく罰せられるべきだと認めたのである。」ここに引合いに出された神も、エホバの神ではなく、運命の神と同様、言葉の綾であって、サイコロの形でしか実存しないものなのであろう。（言葉というものは時代と共に内容が変ってゆく。それなのにフランスの文学者たちは、プレヴォ神父が新らしい酒をもるために使ったあり合せの革袋をたてに取って、「マノン・レスコー」はジャンセニスムだとか、カトリックだとか、馬鹿々々しい議論をして、博士になったり、教授になったりする。恥知らずという美德を、快楽説でどう説明するのか私は知らない。）欺されたド・G・Mには相手を犯罪者として罰することも、放蕩者として、こらしめる事も自由であった。彼は後者を選んだ。日本ではその行先をネリカンという。当時、女の子のネリカンとして La Salpêtrière があった。マノンはそこへ婦徳を取り戻させるために、入れられた。デ・グリューには彼女の消息を知る方法が奪われていた。「だが、それを知らなかったのが、かえって私には幸せであった。何しろ、その恐ろしいいきさつを全部知ったならば、私は意識を失うか、ことによったら、命までも失っていたかもしれないのだ。」デ・グリューの表現は、時々オーバーなことがある。しかし、我々の知る限り、サルペトリエール収容所は、設立の趣旨は道にはぐれた女の子を矯正するためであったかもしれないが、18世紀に於いてはむしろ、貴族や金持に犯された後で捨てられて、文句をつけた女性収容されて、彼女達に婦徳を回復させるために、野獣のような暴力がふるわれていたらしいのだ。男の子の方是怎么かというサン・

ラザール收容所が待っていた。

サン・ラザールは、父権に対して絶対的な服従を守ろうとしない太陽族を收容するところであった。新入りのズボンをぬがせて、鞭で血が出るまでたく。ボーマルシェやミラボーも、親父のことを聞かないというだけで、この屈辱を受けた。こういう恐ろしい噂を聞き知っていたデ・グリュエーは、收容所長の神父様に、「恥をかかさないで下さい。少しでも辱かしめられるくらいなら死んだ方がましです」と、逆手を使って、相手をおどした。貴族の伴に自殺でもされると厄介だという相手の気持を利用したのであった。サン・ラザールにおけるその後のデ・グリュエーは恩赦を予期する代議士のように神妙である。何が彼をそうさせたか。嫉妬という情熱である。

「ひたすら勉学に身を打込んでいる振りをした。偽善者の役割を演じた。……この牢獄を呪い、ここへ自分を押込めている権力を憎むのであった。」何故かという、彼はG・Mがマノンを独占するために彼を遠ざけたのだと信じ込み、マノンはG・Mの腕にいだかれて居るのだと想像していたからだ。どんなことをしても、ここを脱出してマノンを取り戻さなければならない。この情熱は、デ・グリュエーの思想にも大きな変化を与えた。地位や金を持っている馬鹿者が才能のある人々の為に利用されるのは神様の摂理であるという考え方は、すでに彼にあったが、更に、俗人と超人との間には、生れつきの能力に本質的な差があり、自分はその後者に属するという考えが生じた。こんな立派な人間を、閉じ込める事こそ、最大の悪なのだ。

快樂論の通説通り、「大部分の人々は五つか六つの強烈な感情を知るのみで、彼等はその範囲で生を営み、どんな心の動きも結局はそこに帰結されてしまう。もし彼等から、愛と憎しみ、快樂と苦痛、希望と不安を取り去れば、人々はもはや何一つ感じなくなってしまうであろう。」つまり、快樂と苦痛に一切の行動を支配される動物にすぎない。ところが「もっと高貴な性格の持ち主には、五感以上のものが備っていて、自然性の通常の限界を越えた思想や感覚を抱くことが出来る。そしてこの偉大さによって俗人の上に位するという自覚を持っ

ていればこそ、更に羨望すべきものは何一つ無いのである。」とデ・グリュエは考え、さらに自分にはこの悲しい長所がある事を発見したと思った。彼は一躍して自分は天才であり墮天使であるという 19 世紀のローマン主義者になったのだ。

なんとかしてサン・ラザールから出たいという望みは順調に達せられそうに見えて、危うく逆転しそうになる。それは G・M 氏によって摂政時代の社会悪が結集されるような事件が起ったからだ。神父さまの話しに依ると、警視總監がデ・グリュエをサン・ラザールに入れたのは、専ら G・M の圧力によるのだから、神父から G・M に話をすれば放免出来る筈だというので、尽力を頼んだ。G・M も承知したので、万事 OK かと思われたが、G・M の口から、マノンがサルベトリエールの収容所に入れられて、2 ヶ月間「婦徳を授けられている」と聞いて、頭に来たデ・グリュエは相手を床に倒して喉を締めた。「正義に充ちた神様、こんなひどい侮辱を受けて、一瞬間たりとも生きていられるでしょうか。」先に云った通り、サルベトリエールで婦徳を授けられている愛人の事を考えれば、「誰でも意識を失うか、生命までも失わざるをえない」のである。もし神様が存在するならば、こんな非道な事をお許しになる筈はない。だから、神様は存在しないのだ。

修道士に助けられた G・M は、デ・グリュエに「サン・ラザール名物として知られて居るあらゆる刑罰を、この野郎に課してくれ」と命令した。神父がためらって居ると、G・M はおれは側近の知り合いだ、おれに抗う奴は全部首だと、「棄てゼリフを残して引上げた。」まるで自民党の陣笠みたいな奴である。

情熱は、デ・グリュエにこんなへまな真似をさせたが同時に、素晴らしい知慧も授けた。彼は自分とマノンに対する G・M の悪虐な行為は「ただ復讐がしたいからです」と神父に対し涙乍らに「自分達に最も都合のいいように話してみせた。」神父さまはこの話に丸め込まれて、警視總監に交渉したところ、G・M から新たな圧力をかけられたから、あと 6 ヶ月は釈放出来ないという返事を受けた。もうこうなっては実力行使あるのみだ。そこでマノンの兄に連絡してピストルを

手に入れ、メリケン映画なみに収容所長の神父様を脅迫して脱獄し、その際これを遮ぎろうとした一人の看守を射殺してしまう。デ・グリュエの行った悪事のうちで、一番取りかえしのつかない悪事はこれであるはずだ。ところが彼は人殺しをやったにもかかわらず罰を受けないで済んだ。現在でも神は白人のためにあるのだから有色のステューアーズ殺しは罪にならないと考える教会に属する神父さまは、黒人や貧乏人に魂はないと考えて、この事件が自分の責任になる事だけを恐れて、総てをうやむやに葬ってくれたのである。どんな制度も、G・Mやこの神父さまに運用されるような時代には、有害無益というべきであろう。デ・グリュエは更にサルペトリエールの理事の息子ド・T氏に頼んで、マノンの救出にも成功する。有力者の力添えと、袖の下の金さえあれば、悪い事をしても、心配はない世の中なのだ。

脱獄事件には、例のチベルジュにも一役かわせた。だが、それは「彼に手伝ってもらおうと云うのではなく、彼をうまくだまして使おうと思ったのであった。」このチベルジュとデ・グリュエの間に重要な議論が交される。議題は真の幸福とは何ぞやという問題である。快樂説に対してはいろいろ反論がある。人間の行動はすべて快樂を求め、苦痛を避けることに帰納されるというが、これにあてはまらないような人間が現実存在している。例えば、ケチンボーはすべての快樂を犠牲にして金を溜めているではないか、坊主の大部分は要領よく行動しているが、快樂を犠牲にして後生を願っている変態もいないとは限らない。これらの例外が説明出来ない限り快樂説は学問的に立たない事になる。これに対して、哲学者は答える、ケチン坊が金を溜めるのは、金はあらゆる快樂と交換できるので、最初はこれを蓄積して将来における大きな快樂をうる為、身近かな快樂を犠牲にしたのである。ところが金が溜まるにつれ、それが予約する想像的快樂がケチンボーにとって、大きな快樂となってしまった。想像と惰性の力で、金を使うことは彼等にとって非常な苦痛となっているのだ。だから一見矛盾するように見えても、使う当もない金を溜める事が、彼等にとっては楽しくてたまらないのだ。同じ様に、回教の坊主は、この世で難

行苦行をすれば、来世で素晴らしいハーレムが与えられるというマホメットの嘘言を信仰しているのである。だから現世では女にもてないという自信が充分にある奴は、来世で与えられる筈の美しい天女達の映像を追い乍ら、マスターベーションをやっているのだ。この二次的、三次的、想像的、快樂で信仰を説明しようというデ・グリュューと、現世的快樂には何の価値もないというチペルジュとが、マノンを契機として、たまたまサン・ラザールの収容所で討論することになった。

デ・グリュューは云う、私は恋に迷い、その為にサンラザールに放りこまれ不幸なのだが、「この恋の中にこそ、片時も自分の幸福を求めずにはいられない。」と。チペルジュは答えて、多くの罪人たちは、悪徳のもたらす偽の幸福にだまされて、美德の与える眞の幸福を避けるのだ。ところが、君はそのことを承知の上で不幸におちいつているのだから、「思想と行動の上に矛盾」がある、と述べる。この偽りの幸福とか眞の利益とかいう啓蒙哲学者の用語を坊主自身が使っているのは面白い。デ・グリュューはこれを反駁する。「美德のもたらす幸福にも、幽閉、はりつけや暴君の審判や拷問などという苦痛が混っているのではないか。これらは広い意味の悪だ、つまり悪を通じて、初めて人は幸福になれるのであり、悪自体の中にも想像の力によって喜びを見出せるのだと云うのが君の主張だ。私も君と全く同じ行動をしているのに、どうしてそれが矛盾であり、無分別なのか。マノンを愛する自分は峻しい道を歩いているが、いつかは彼女との平和な生活という目的地に達する希望があるから、そこにはいつも楽しさが敷きつめられている。君の立場からも、私の立場からも、総ては皆同じだ。両者の間に差があるとすると、恋の与える幸福は手近にあるのに対し、美德のそれは、あの世にあり、信仰以外には保証のないものだ。」この議論を聞いてチペルジュは驚いた。娼婦と寝て得られる愉悅と、信仰によって与えられる法悦とには、名前は同じ快樂であっても質的な違いがある筈だと思うからである。だが、そんな違いはない、とデ・グリュューはいう。「事実には則して判断してみよう」美德や東ベルリンから逃げ出す奴は山程いるが、恋や西ベルリンから逃げ出す人は僅かしか

ない。結局、美德と恋との差は、イデオロギーの問題ではなくて、「両者がそれぞれに具えている力という物質的なものではないのかね。」

次に問題を人間性、人間の自然という立場から論じてみよう。この立場からすれば「人間の最大の幸福が快楽のうちにある事は疑いない。」更に「あらゆる快楽の中で最も楽しいものが、恋のそれであるという事は自明の理だ。」これによって明らかな通りデ・グリューは、恋に盲目になって、自ら不幸を求めたという前書は、検閲を恐れた作者の嘘っぱちであって、快楽主義の立場から、マノンとの恋を最大の幸福と考えて、これに万事を賭けたのである。

その間、デ・グリューも、マノンも自由の身となり、マノンの極道者の兄の自衛隊は、インチキ賭博がたたって、同じ自衛隊に、射殺される。自衛隊が一人死ぬだけで多くの人が幸福になれる。一応万事が目出度しとなって第1部が終る。

第2部

サン・サルベトリエールでデ・グリューが聞いただけで意識を、生命を失うほどのひどい目にあったマノンに対し、デ・グリューは「過ぎ去ったいやな事は、水に流してしまおうよ」と云った。彼は貞操を生理的に考える俗人ではすでになくなっていた。だが、脱獄、殺人というような英雄の行為をやり乍ら、生活のめどがつくと、彼は又月形俊平太に戻って仕舞う。彼はド・Tのお蔭でマノンの歓迎会を開くと、超人から馬鹿者に返ってしまい、また家計簿をつけ始める。馬鹿野郎になり下ったデ・グリューは考える。「人間の富は、その欲望を満す手段として、どれだけ利用されるかという点から計算すべきものであろう。ところが私にはもう満すべき欲望とっては何一つなかった。」マノンと毎晩寝る事。これだけでこのオッチョコチョイト、俗流快楽説は満足出来るのだ。そこで、サンコは亦もや生活設計をする。「将来」に対する心配は少しもない。おれは巴里でどうにか暮しているが、20歳に達しているのだから母親の財産を継ぐ事に対して、おやじは反対出来ないはずだ。その内、親父もあの世へ行くだらうから、それま

ではインチキ賭博でつないでおこうと。

ここで、現在の版ではイタリアの金持がマノンの姿に迷って、それに応じた振りをした彼女から鏡を見てごらんといわれる滑稽話が入っているが、これは 1753 年の改訂版になってから挿入されたものである。第 2 部には事件が少ないので、おそらく作者は 1 部との均衡をもたせるために付け加えたのであろうが、蛇足である。つきまとうイタリア貴族をマノンがからかったという事件は、原作に何の影響もない。20 歳になるやならずで、まるで退職官吏のような考えを持つインチキ賭博師、殺人者を、神がもし存在するとすれば、罰しない筈があるか。一見幸福な、事実上、退屈な 2 人の生活を変えるために、新しい事件が起る。それは、彼等にとって憎んで余りある G・M の伴がマノンを恋したということである。マノンをサン・サルベトリエールから救ってくれたド・T と彼とは友人であった。その関係で、マノンに近づいて来たのである。この挑戦を受けて立つべきかどうか。中国に放鳩という詐欺がある。鳩を売っても、原則として、持主のところへ帰って来る筈だ。ところが鳩が新しい住居の方が気に入れば、戻って来ない。鳩の心をしっかりとらえていると信じたデ・グリュエーは、財宝を持って自分の懐に戻って来ると信じて、この冒険にふみ切った。

ところが鳩の心は又別であった。デ・グリュエーが親父に対して使った手をまた使うだろうと百も承知で、恋を打明ける G・M の伴に対しマノンは心をひかれた。彼女は生れつき冒険好きなのだ。それよりむしろ、サンコ・パンサに落込んだ、デ・グリュエーを反省させたかったのだらう。マノンとの話し合いでは、鳩は鴨のようにネギを背負って帰って来る筈なのに、デ・グリュエーが受取ったのは手紙を持った身代りの女の子であった。当然この手紙には何か実に冷酷な、人をふみつけにした調子があったので、こちらもこの女相手にマノンを裏切ってやろうと思ったのだが、ふだんあれ程活動好なデ・グリュエーのセガレがどうした事か神意により、この時だけは意志に従わなかった。不思議なマノンの魅力よ！

放した鳩がすぐには帰って来ないと悟ったデ・グリュエーはあわてて、

ド・T氏と相談した上G・Mの俸を外出させておいて、マノンに会う。裏切られたのは「これで三度目だ」三度目の正直というので、例によって相手の不実をせめるが、また例によって「前後を忘却してすまなかった。自分は獣のような人間であり彼女のような女から愛される資格のない男だ」とあやまった。これで仲直りは出来たのだが、デ・グリュエは何もかも棄ててここを立去ろうというのに、マノンはどうしても空手では引き揚げないと主張する。そこへド・T氏からの連絡があり、G・Mの俸を路上で取り押えて、彼の用意した晚餐を食った上、彼の寝台で2人で楽しんだ上、づらかったかどうかという手紙を受取った。デ・グリュエはこれを面白いと思いつきと受取ったが、マノンは真剣にこれを実行に移そうと主張して、結局、女の意見が通る。子供のいたずらのようなこの冒険は、頼まれた近衛兵がG・Mの俸を捕えた時、従僕に逃げられたため、破綻してしまう。その口から事件を聞いた老G・Mは警視総監のもとに駆けつけ、非常命令を出してもらった上「自らも借り受けた特別捜査隊を引き具して」デ・グリュエとマノンを逮捕する。警察はこれ程までに貴族と金持ちの味方なのだ。老G・Mは2人をプチ・シャトレ（軽犯罪刑務所）へ引いて行けと命じた。馬車に乗せられて、牢獄へ行く途中、デ・グリュエは叫ぶ「神よ、貴方はあなたの最大の傑作（マノン）に、どうしてこんなむづい扱いをなさるのですか……G・Mのように下賤な人間どもが、運命の神からあらゆる恩恵を受けているのに。」と。さきには、貴族や金持ちが、才能のあるものに奉仕するために馬鹿に生れついている摂理について神を讃えたのだが。

警視総監は、デ・グリュエにこの事件は大した事ではないし、お前は身分もあることだから、すぐに釈放されるだろうと云ってくれた。だがマノンの事を頼んでみたら「恋よ、恋よ、お前はどこまでも知慧と相容れないものなのか」と嘆息するだけだった。他方G・Mと近衛兵の手から助け出されたその俸と、デ・グリュエの老父との間で相談が行われ、マノンはアメリカへ流刑と定められたのだ。これが身分のある青年を誘惑したと認められた女性のたどる道なのだ。

マノンの身を案じて老父の家から逃れてシャトレ刑務所へ行ったデ・グリュエーは、そこで看守からマノンの身の上を知らされ、「マノン」を救い出し、マノンのために復讐を遂げるために一身を捧げよう」と決心する。即ち「G・M父子のみならず、このような正当な復讐に於いては親父といえども生かしておけない」という健気な気持ちを起こしたのである。

だが、と、外氣に当って冷静を取り戻したデ・グリュエーは考え直した。3人を殺してもマノンが助かるわけではない。マノンの救出が先決問題だ。そこで親父との最後の談判となる。シャトレの牢屋で親父に会った時にも、彼は自分の今までの行動には「大体に於いて不名誉なところはなかった」ことを一々有名な例を引いて親父を説得しようとした。「フランスの紳士の $\frac{2}{3}$ は情婦を持つことを名譽と心得ている」し、ヨシダ、イケダや王室に関係の深い方々が「^{ギャンブル}賭博団の親玉」だとすれば、マノンと生活して、賭博で生計を立てるのがどうして悪いのだ。G・M親子から金を捲上げようとした事だって、そんな例は日常茶飯事だしその上、恋の恨みという情状が、こちらにはあるのだ。たてから見ても、横からみても、自分には悪いところは殆んどない。この太陽族の見解は、摂政時代の青年に共通であった。この恐るべき思想を弾圧するために、摂政フィリップとその一味は、強盜殺人を行ったある名家の倅を、みせしめの為に車刑という極刑に処さなければならなかったほどである。デ・グリュエーの老父も倅がこんな考えを持っている以上放っておけば、土で三尺木で三尺「行きつく先はグレーヴのお仕置場だろう」と考え、倅を救うには、マノンを消して仕舞うに限ると考えたのであろう。父性愛が権力を利用できると、残虐行為が平気で行われる。デ・グリュエーはマノンの救出を父親に嘆願したが逆効果であった。「もし誰かがお母さんをあなたの胸から奪い取って行ったら、それを我慢なさったでしょうか。」母の名を引合いに出されて、親父は増々怒った。これで父子は永遠に別れる事になる。「おお、神よ、あなたもまた人間どものように無慈悲なのでしょうか。」その通り。

マノン救出の最後の手段として、流刑の女達を護送する警官を襲撃する手段が残されていた。デ・グリューはG・Mの俸を監禁する時に使った近衛兵を利用した。ところが、金だけ取られて、マノンは取り返せなかった。「世の中の奴等は皆、私に害を加えたり、裏切ったりする。誰一人信用出来ない。」マノンと不幸を共に分つただけだ！だが、財布に残っている金は15ピストール。護送の警官は島行きの女たちとの1時間は、「1エキューが通り相場だ」という。始めは相場で彼女に会えた。ところがカフェやキャバレーと同様、名差しとなると値段が違ふという。段々値をせり上げられて、一文無しにされて仕舞った。文無しが女囚人に近づこうとするのに対しては、四等国の警官は銃口を差向ける権利があった。この悲惨な場面に、丁度物語りの発端の「身分ある人」が通りかかり、お蔭で2人はアメリカまで無事に行ける事になったのである。

流刑と定った時のマノンは、デカルトが方法序説の中で説いた暫定的道徳論つまり彼の親友であったバルザックなどのリベルタンが信奉した、エピキュリズムとストイシズムの奇妙な合金、キリスト教的なもののみじんもないそれを信奉していたらしい。即ち、自分のやりたい事を思い切ってやれ、失敗しても決して後悔するな。ニーチェが尊敬してやまないロドリッグ、サンク、マルス等ルイ13世時代の英雄と同じ境地にあったのだ。社会を批判したり、呪ったりするのは、実力のないインテリ共の仕事であって、英雄のなすべき仕事ではない。カエサルに捕えられた敗軍の将ヴェルサンジェトリックスのように、鎖につながれて両眼をとじていた。そのマノンの眼の前に、親父に連れ戻されて、堅気の娘と結婚すると思っていたデ・グリューがひょっこり戻って来た。マノンは「その瞳をじっと彼の上にすえるのだった。」そして、僅に口を開いて、あなたの身分にふさわしい、彼女と共にいては望めない筈の幸福を、ほかに求めてほしいと云った。これは不信の言葉である。マノンはもともとデ・グリューをそんなに高く評価していなかった。安っぽい快楽主義者であり、家計簿が黒字になれば何もしないで晩酌を楽しもうというやつである。ただ何か危機がく

ると、頭にきてどんな冒険でもやろうと思う。そこに魅力があるだけの男なのだ。世間は、否、文学者達はデ・グリューをマノンの被害者だと思っている。だが実は、もしデ・グリューが自己本位な邪魔をしさえしなかったら、マノンはバカな金持を次々と乗り換えて一生栄耀栄華に暮せたことであろう。彼女にとって重荷であったそのデ・グリューが戻って来た。社会的絆、父親との縁まで切って戻ってきた。そしてマノンが全てを失った時、彼は今迄にないものを身につけていた。それは本当の恋人同志というものは「お互いが父であり母であり、身内であり、友人であり、富であり、幸福であって、全てを相手のうちに見出すはずである。」という悟りであった。情熱は相手から全てを奪おうとする間は、まだ本物ではない。相手に全てを与えようとする時に、凡悩がぼだい心に変る。abnégation（自己犠牲）とは何か。獣に近い人間が仏の心に達するのが本来であって、天人界には凡悩がない。だから天人は仏になれない。ところが人間は凡悩の為に獣に近い存在であるが、凡悩があるからこそ、仏になれるのである。ローマン派の尊ぶabnégation（自己犠牲）とはこの境地でなければならない。それなのにユーゴー・ミュッセと共にローマン派を代表する Alfred de Vigny は恋人を殺されて気の狂った女性を車に乗せて一生を送った老兵を自己犠牲の代表と思って、つまらない小説を書いたが、誰も共鳴しない。もし、彼がその狂女に恋し犯したりしたあとで、そのような生活を送ったのだったら、今少しましな小説になったであろう。その意味ではブレヴォ神父の方がヴィニイよりもはるかにローマン主義的である。アメリカ行きに対してデ・グリューはどう考えていたか。「きっとあそこには G・M や、親父のような残酷な人間はいないだろう。……アメリカの土人達は自然の法に従って暮しているわけだ。G・M にとりついているような狂人じみた強慾さも、父を私の敵にまわしたような空想的な名誉心もその人々は知らないだろう。」自然の生活、デ・グリューは「その点では安心していた。」だが、……とデ・グリューは例によってサンコ・パンサ的思考に戻る。ルソーの自然に帰っても金がいる。彼の考えは正しい。「ボールとヴィルジニー」の

自然的な生活を支えていたものは何か、誰か？ 金で買って来た真黒な男と女だ。生きて行くためには文化的であろうと自然的であろうと金がある。デ・グリュウはその金の工面に努力したが都合がつかなかった。その情けない顔を見てマノンに相手がさらに墮落するのを恐れて、心中するか、自分を殺して、他によい女性を探して幸福を求めてくれとせがんだ。彼女の言葉は彼を戦慄させた。そして「女に勇気を持たせるものは、彼女の愛する男の勇敢さをおいて他にない。」とやっと思いついた。これで本当の悟りが開けたのである。当時植民地にはロハで行けた。南米棄民のために土地なき農民を裸にする自民党政府が存在しない時代だったからだ。2ヵ月の航海後、船はヌーベル・オルレアンについた。その間2人の間はまるで愛と奉仕の絶えまない競争であった。植民地が「自然」でないことは解りきっている。到着した30人の女達は、総督の権限により、公営住宅並みにイカスのはコネで、ただけでないのはくじ引きで払い下げられる運命にあった。マノンはデ・グリュウと結婚しているという嘘が信用されて、この野蛮な分配から免れた。嘘つきな神様のおかげであろう。この荒々しいアメリカも腐敗し切った当時のフランスと較べたら西部劇のアメリカが、「アンタッチャブル」のアメリカと較べたらはるかによかったようにましであった。だから2人はここで、堅気になろうと考えた。デ・グリュウはサラリーマンになり、マノンは世話女房に変わった。2人ともその気になりさえすれば、社会がそれを妨げさえしなければ、人並みに尊敬される生活を営む能力は十二分にもっていた。金を掘り当てることしか考えない奴、フランスでは生れつきの悪党と思われて当地に来た人々も、この夫婦には親切であった。ところが神という先天的痴呆症、当然どこかに収容しておくべき奴がしばり首に値するような事件を起してしまった。つまり「デ・グリュウが美徳に立返ろうとした時、神は最も残酷な罰を用意していた。」のであった。夫は妻をいたわりつ、妻は夫をしたいつつという場合には観音様なら一肌脱ごうという時、デ・グリュウが「道にかなった恋にあこがれた」為にマノンと正式に結婚しようと決心し、相手がそれを喜んで受入れた時

にエホバは天罰という兇器を振ったのである。

サンヌレという荒っぽいが正直な男がいた。マノンの姿をはじめて見た時からあこがれたが、人妻だと思っていたので、騎士道精神に従って彼女とその夫に出来るだけ親切に振舞っていた。ところが2人が夫婦でないということを、2人が夫婦になろうとしてその手続を頼んだ町長と坊主の裏切りによって知ったので、土地の風習に従って、デ・グリュエの手からマノンを奪おうとして彼と決闘する。相手を刺し殺したと思ったデ・グリュエは町長と坊主の、つまり神様の復讐を恐れて、野蛮人がイギリス人のいる場所にたどりつけるかもしれないというはかない希望だけを頼りにマノンと駆け落ちする。その結果、マノンは疲れ果てて死んでしまった。その間のデ・グリュエの気持はどうだっただろうか。「どんなに彼の祈りは激しく真剣であったろうか。それなのにそれを聞きとどけてやらなかった。」とは、おお、神よ、あなたは何と有害無益な存在なのだろう。

さてここまで聞いていただければ以下の物語の結末はしいて読者の傾聴をわずらわすほど重要なものでない。だから後になって、「神はこれほど激しく私を罰した後、それらの不幸と罰を私にとって役立つものとしようとされたのだ。神の栄光は、私を目覚めさせ、私の身分と教養にふさわしい思想を呼び起した。」という反動的な台辞には政府と教会に対する偽装以外の意味はないのである。醜惡な社会秩序と愚劣な摂理の犠牲となってデ・グリュエの、我々のマノンは殺されたのである。だが、旧制度と神が殺された後にもマノンは生きている。

む す び

マノン・レスコーは冒険小説である。子供も大人も喜ぶ冒険談である。アンドレ・ヂードはかれの「フランス十大小説」の中にマノン・レスコーを加えるに当り、それが、ダニエル、デフォーの「モール・フランダース」に似ていることを理由にあげている。男だったらロビンソン・クルーソーやガリヴァーになっていたはずの「モール・フランダース」は冒険談の一種である。

冒険談は社会に建設を求めれば騎士物語となり、破壊を求めれば
 股旅物となる。マノンはその後者であるが、ほとんど同時に出版
 されたマリヴォーの「マリヤンヌの生涯」はその中間に位するハラハ
 ラ小説、パンチー小説で、闘牛に赤い切れを見せて興奮させ、最後に
 仕止めてしまう、ちゃっかりした冒険談である。この種の小説が流行
 したのは18世紀のフランスのお嫁さんは、オメンとアソコが良いだ
 けでは駄目で、17世紀まで内地米と準内地米と別けられていたのが、
 一等米 *famille honnête* 二等米 *bonne famille* 三等米 *filles de con-*
dition その下に徳用米、さらに貧乏人は麦を食えという池田式格付
 けができたからである。マリヤンヌがお米は品質本位でといっても、
 マノンが自由販売を実行しても、結局おなじことなのである。封建的
 勢力と特許商人の合流によって出来上った格付けを破壊するのが直接
 の目的である。

だがこんなバカバカしい格付け、不合理は絶対王政的、自民党的社
 会、崩壊すべき社会が露呈した害悪の一面にすぎない。滅びる社会は
 必ず「人間万事金の世の中」ということを切実に示すものだ。「マノ
 ン・レスコー」は恋愛小説といわれながら、金の力を極端に突き出し
 ている。だが批判から攻撃に移る場合、どこを打つべきか。王権と教
 権は新興ブルジョアジーにとって大きな障がいであるが、親権もこれ
 に劣らぬ敵である。尊属という害獣を退治しないかぎり近代社会は成
 立しない。だから明治以来の日本文学の課題は「父と子」であった。
 老G・Mによって代表される父性悪はあらゆる権力を青年の圧迫に利
 用している。親権はさらに自分の子供を守るために罪のないマノンを
 消すことを決議させ、その結果、デ・グリュエに正義のためには父親
 も殺そうというフランス文学はじまって以来の健気な決心をさせる。
 「マノン」はフランス文学には数少ない「父と子」の小説である。恋
 愛を題材とした冒険談としてまさに扇的を射とめた観がある。優れた
 社会小説である。

次にこの小説は全く非キリスト教的な小説である。そこには罪の意
 識が少しも見られない。人間は「快楽を求め、苦痛を避ける動物」だ

という快楽説が基調になっているから善悪は結局個人的立場からは損得に還元されてしまうのだ。さらに社会的立場から悪と見做される行為もブルジョア的社會の成立以前にはその原因が社會の欠陥の中に求められる。この小説が社會小説となっているのも、快楽説に基く旧秩序の批判が行われているからだ。

さらに快楽説を積極的、革命的な理論にするためには情熱^{パッション}の讚美が必要となる。未開人や修道僧も快楽を求め苦痛を避ける点で一般人と変わらないが、快楽の追求よりも苦痛の回避に向うから、その行為は生産的でない。よき労働者はより多くの快楽を求めるためにより多くの苦痛を甘受しなければならない。そこから怠惰を惡徳とし、情熱を美德とする積極的快楽説が生れる。18世紀フランス小説では、大体戀愛イコール欲望であったのに「マノン」は戀愛イコール情熱であり、冒險主義的、攻撃的な作品となった。

快楽説から情熱論への移行は、出発点であった現實主義を理想主義へ移動させる。情熱は必然的に對象の完全可能性を追求するからだ。愛欲の對象にすぎなかったマノンが非現實化され、主体であるデ・グリュエに自己犠牲を喜んで行わせる。對象のマノンも人間であるから同様の反作用が行われる。かくて、詐偽師と娼婦の物語が情熱に淨化されて騎士とそのダーム、ロドリッグとシメヌの物語にまで逆もどりしてしまうのだ。

その内容から見てこの小説は18世紀後半か19世紀前半に書かれるべきであったろう。もちろんプレヴォ神父のクラシスムはローマン主義文學に相應しくはないが、これが1731年に書かれたということは一つの不思議である。この謎の鍵は恐らく神父の接取したイギリス思想、イギリス文學の中に求められるべきであろうが、その吟味には筆者は全くその適性を欠いている。